慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	波多野善大著 『国共合作』
Sub Title	Yoshihiro Hatano, Kuomintang-Communist Collaboration in China
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1974
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.47, No.2 (1974. 2) ,p.119- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00224504-19740215-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国共合作

•

作は、帝国主義列強と軍閥の中国における支配に対して一九二四年 史を再構成しようとする試みである。言うまでもなく、第一次国共合 三九年のどの事件をもつて第二次国共合作の崩壊と著者は見ている をにぎつたのである」、という一文があるにすぎない(カッコ内の年と た中共は、十二年をへた第二回合作の分裂においては中国の支配権 のとして、わずかに「第一回国共合作の崩壊(一九二七年)に際して 第八章を「(第二次)国共合作の崩壊」の説明にあてているが、第二 七年から四五年にかけて結成されたものであつた。著者は、最後の から二七年にかけて中国国民党と中国共産党との間で結成された統 合致しないし、「十二年をへた第二回合作の分裂」とすれば、一九 崩壊 (一九二七年) 以来「十二年をへた第二回合作」とすれば事実に **傍点は評者註)。 この表現はきわめて曖昧である。第一次国共合作の** は、華中・華南のゲリラ部隊としてその存在を維持するにすぎなかつ 次国共合作がいつ終るのか明示していない。その時期を示唆するも 一戦線であり、第二次国共合作は、日本の中国侵略に対して一九三 本書は、二回にわたる国共合作の形成と崩壊を通して、中国現代

のであろうか。また、この文章が第二次国共合作が形成されて以来のであろうか。また、この文章が第二次国共合作の崩壊は一九四九年となり、一九四五―四九年の内戦期も国共合作の謝壊を画するものであるかが明らかにされなくてはならないであろうし、それが「二十二年」の誤植であるとすれば、一九四七年のどの事件が第二次国共合作の副壊を画するものであるかが明らかにされなくてはならないである崩壊を画するものであるかが明らかにされなくてはならないである方し、それが「二十二年」の誤植であるとすれば、同じく一九四五一四九年の国共内戦期も依然として国共合作の継続期間と見なされて以来のであろうか。また、この文章が第二次国共合作が形成されて以来のであろうか。また、この文章が第二次国共合作が形成されて以来のであろうか。また、この文章が第二次国共合作が形成されて以来のであろうか。また、この文章が第二次国共合作が形成されて以来のであろう。

対するソ連・コミンテルンの働きかけ、二つの合作期間の中間にあ対するソ連・コミンテルンの働きかけ、二つの合作期間の中間にあれている。すなわち、第一次国共合作においては、党内合作ゆえにけている。すなわち、第一次国共合作においては、それに加えて英米仏諸国の後援たが、第二次国共合作においては、それに加えて英米仏諸国の後援たが、第二次国共合作においては、それに加えて英米仏諸国の後援をあった。さらに、中共は、二回にわたる国共合作において、労働者であり、このことが、以上に述べた国共合作の特徴を導き出す過者であり、このことが、以上に述べた国共合作の特徴を導き出す過程の叙述のなかに反映されているように思われる。すなわち、軍閥と観期の中国、そこから生まれてくる新しい革命勢力、軍閥政権に対するソ連・コミンテルンの働きかけ、二つの合作期間の中間にあ対するソ連・コミンテルンの働きかけ、二つの合作期間の中間にある。すなわち、第一次国共合作の性格をいくつかの面から特徴が著者は、二回にわたる国共合作の性格をいくつかの面から特徴が

紹介と批評

視していることであり、そこにまた本書の問題点があつ た の で あ視していることであり、そこにまた本書の問題点があつ た の で あは、二回の国共合作形成に対するソ連・コミンテルンの影響を重要ではないがゆえに、中共にかんする叙述のなかに必ずしも創見が多に対して、著者自らも認めているように、著者が中共研究の専門家つた国共分裂期の国民党にかんする著者の叙述は適切である。それ

__

ではつてたかまつた中国国民のナショナリズムを抗日に組織して、 とである。つまり、第一次国共合作は、社会主義国ソ連を組織して、 とである。つまり、第一次国共合作は、社会主義国ソ連を維持するためには先進資本主義国の資本主義に対撃を与え、本国におけるプロレタリアートのブルジョアジー打倒の闘争を援助しなければなり、そのためには「先進資本主義国の資本主義に対撃を与え、本国におけるプロレタリアートのブルジョアジー打倒の闘争を援助しなければならない」というレーニンの構想から生まれてきたものであつた。そらない」というレーニンの構想から生まれてきたものであつた。そらない」というレーニンの構想から生まれてきたものであつた。そらない」というレーニンの構想から生まれてきたものであつた。そらない」というレーニンの構想から生まれてきたものであつた。そらない」というレーニンの構想から生まれてきたものであつた。そらない」というレーニンの構想から生まれてきたものであつた。そらない」というレーニンの構想から生まれてきたものであつた。そらない」というレーニンの構想から生まれたり運動を煽動し、対対はない。 ということである。ということである。ということである。ということである。これに対して、第二次国共合作は、いずれもソ連が自国のからくるファッシズムの資本主義語国に接近し、激化する日本の侵略がよりないませい。

的に異つていた、と著者は考えている。いて、二回の国共合作は帝国主義諸国の中国への内政干渉とは本質反帝反封建の運動が中国国民の客観的利益と合致したという点におンの意図から生まれてきたものであつた。しかし、ソ連の意図した東からくる日本のファッシズムの防波堤にしようとした」スターリ東からくる日本のファッシズムの防波堤にしようとした」スターリ

以上の観点から、著者は二回にわたる国共合作の形成と崩壊を分析している。第一次国共合作については、ソ連の中国に対する外交がしている。第一次国共合作については、ソ連の中国に対する外交がしている。第一次国共合作については、ソ連の中国に対する外交の人々の果した役割にかんする著者の叙述は必ずしも新しいものでの人々の果した役割にかんする著者の叙述は必ずしも新しいものでの人々の果した役割にかんする著者の叙述は必ずしも新しいものでいた。しかし、従来の研究ではあまりとりあげられなかつたが、本書のなかで注目すべき一つの点は、ソ連・コミンテルンとその後中共指導者になつた人々との接触において北京大学のロシア文学の中共指導者になつた人々との接触において北京大学のロシア文学の本書のなかで注目すべき一つの点は、ソ連・コミンテルンとその後中共指導者になつた人々との接触において北京大学のロシア文学の本書のなかで注目すべき一つの点は、ソ連・ロックを表表していることである。

「プロレタリアート、中・貧・雇農の勤労大衆」に求めていた。ま連を擁護するという(コミンテルンの)観点」をとり、その 基盤 を他の帝国主義諸国を同列におき、これら帝国主義の攻撃に対してソを著者は強調している。例えば、中共は、満州事変直後に「日本と成への重要な政策転換に果したソ連・コミンテルンの役割の重要性成への重要な政策転換に果したソ連・コミンテルンの役割の重要性

主体的判断が入り込む余地がなかつたのかどうかが検討されなくて主体的判断が入り込む余地がなかつたのかどうかが検討されなくて主体的判断が入り込む余地がなかつたのかどうかが検討されなくて主体的判断が入り込む余地がなかつたのかどうかが検討されなくてきないは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものなるいは中共が当時直面していたソヴィエト革命の要請に基くものか、あるいは中共が当にないだとするとは何を意味するのか、そこには中共のを承認していないということは何を意味するのか、そこには中共のを承認していないというとは何を意味するのか、そこには中共のを承認していないというとは、一定には中共のを承認していないというとは、一定には中共のを承認している。

あろう。

いるのである。

なのことな書の特徴であるとともに、そこに問題が含まれてる。この点こそ本書の特徴であるとともに、そこに問題が含まれてはそのことによつて何ものかに挑戦しようとしているかにさえ思えに対するソ連・コミンテルンの役割の大きさを執拗に強調し、著者に対するソ連・コミンテルンの役割の大きさを執拗に強調し、著者に対するソ連・コミンテルンの役割の大きさを執拗に強調し、著者に対するがある。

はならないであろう。

の主体性とその立場の変化が分析の対象とされなければならないでいたことを考慮すれば、国共合作にいたる国民党側にも、合作において孫文の率いる国民党が誕生間もない中共に対して圧倒合作において孫文の率いる国民党が誕生間もない中共に対して圧倒しない。しかし、見過してならないことは、国共双方、とくにソ連しない。しかし、見過してならないことは、国共双方、とくにソ連しない。しかし、見過してならないことは、国共双方、とくにソ連と国民党に立場をとっていたるとの立場の変化が分析の対象とされなければならないで、利も否定とない。

著者は、この問題を無視しているわけではない。例えば、一九二年桂林におけるマーリンとの会談で、孫文は党内合作の形式を示したのではないかと著者は推定していること、国民党右派分子が変したのではないかと著者は推定していること、国民党右派分子が変したのではないかと著者は推定していること、国民党右派分子が変したのではないかと著者は推定していること、国民党右派分子が変したのではない。問題は、国民党・孫文が第一次国共合作形成の過程で、ソ連・コミンテルンの影響を受け、その立場を変化させつの過程を構造的に把握する努力が著者に欠如しているように思われることを構造的に把握する努力が著者に欠如しているように思われることを構造的に把握する努力が著者に欠如しているように思われることを構造的に把握する努力が著者に欠如しているように思われることを構造的に把握する努力が著者に欠如しているように思われることを構造的に担けるように思われることを構造的に把握する努力が著者に欠如しているように思われることを構造的に把握する場合に表する。

望を述べていることは、どのように理解されるのであろうか。さら月に、孫文はアメリカ公使シャーマンを訪れて、和平会議開催の希れるのであろうか。国民党が反帝国主義を鮮明にした一九二四年一ツ、ソ連への接近は、彼の民族主義のなかでどのように位置づけらいくつかの例を示して み よ う。一九二一一二二年の孫文のドイ

評

がその主体的立場を放棄し、中共の立場に同調したことを意味する 言」と評価している。このことは、国民党一全大会において国民党 を重視し、それを「主として中共の主張を反映した一全 大 会 の 宣 国民党一全大会宣言の起草におけるボロディンの役割 しかし、国際関係において、一国との提携が永久不変のものである 結果的には、孫文の米日両国への期待は実現しなかつたのである。

のであろうか。

あつたという立場を私はとつている。とすれば、孫文の一九二四年 すものであり、孫文が中国に利権をもつ列強を帝国主義と認め、ソ 想の全体系に言及することは避けたいと思うが、以上の三例はつぎ 党・孫文の立場を考えるうえで重要である。ここで私は、孫文の思 理解されるのであろうか。このことを明らかにするためには、孫文 のシャーマンへの接近、ならびに、北上途上での訪日はどのように 連との提携にふみ切つたのは一九二二年六月の陳炯明の叛乱以後で の勢力均衡のりえに、民族主義を実現しようと考えていたことを示 のように理解することは可能であると思われる。すなわち、一九二 一―二年の孫文のドイツ、ソ連への接近は、依然として孫文が列強 以上においてとりあげた三例は、第一次国共合作形成過程の国民 日への接近の動機が解明されなくてはならないであろう。一

きかけであつたとする解釈もなり立つのではなかろうか。 とには無理があろう。そこで、孫文の米、日への接近は、国家とし 強の勢力均衡のうえに民族主義を展開しようとしていたと解するこ あつた。したがつて、少くともこの時点で、孫文が従来のように列 九二四年において連ソ政策は国民党・孫文のなかに根をおろしつつ 日ではなく、両国における孫文へ同情を寄せる分子への働 事実、 を過大に評価していることと表裏をなすものであつたと言わざるを り、そのことは、国共合作形成におけるソ連・コミンテルンの影響 著者は、第一次国共合作形成にいたる国民党側の重要な諸事実を指 ことができるであろう。以上述べてきたことからもわかるように、 孫文の立場は、宣言と講演の論理の間を動きつつあつたと理解する 民主義に対する階級調和的解釈の域をはるかに越えるものであつた 現実に進行しつつあつた反帝国主義的大衆運動は明らかに孫文の三 文の主張を講演の中に固定して考えることができるのであろうか。 とによつて彼の主体性を保とうとしていたのである。それでは、孫 孫文は、宣言を承認しつつも、自らの論理を講演の中で展開するこ 和的観点、伝統的概念への依存の諸要素が見出される。したがつて、 が採択された後の孫文の三民主義の講演を見ると、そこには、階級調 戦線の論理から三民主義に新しい解釈を与えている。しかるに、宣言 者の指摘に私は賛成であり、事実宣言は反帝国主義的諸階級の統一 てであるが、その内容が孫文の論理と必ずしも一致しないという著 てはならないであろう。さらに、第三の国民党一全大会宣言につい なかに形成されつつあつた連ソ政策そのものの限界も検討されなく と仮定することが非現実的であるとすれば、この時国民党・孫文の 摘しながらも、それらを必ずしも構造的に説明していな い の で あ し、孫文自身もこのことに気づきつつあつた。したがつて、晩年の

私は、最後にその他の若干の問題点に触れておきたいと思う。

れる。 さらに傍証が必要と思われるのである。 リンの蔣介石への執着を考慮すれば、著者のように断言するには、 張国燾の回想録からそのまま引用している。しかし、当時のスター ディンが軍事的基盤を蔣介石から唐生智へ乗り換えたことを著者は ればならないのである。一例をあげるならば、武漢政府時代にボロ のあるところである。したがつて、張の回想録は慎重に扱われなけ 東沢のライバルであり、かつ彼自身の記憶の正確さについても問題 て貴重な知識をもつていることは確かであるが、その反面、彼は毛 の中心にいた人物であり、それゆえに中国革命の個々の段階に対し 第一の問題は、著者は張国燾の回想録に依存しすぎるように思わ 周知のように、張国燾は中共の創立以来中国の共産主義運動

(一一○頁) は、単に「第二期三中全会」の誤りであろう。 第二は、一九二七年の武漢における「中国国民党第三期中全会」

ように断定するためには、それなりの根拠が示されなければならな 題であるが、毛沢東の党内指導権の確立との関係において、著者の ト地区へ移つた後も、「実権はもちろんソ区に根をおろした毛沢東 にあつた」と述べていることである。中共中央移転後の江西ソヴィ エト地区における毛沢東の指導性は今日この時期の研究の主要な課 第三は、著者は、一九三一年に中共中央が上海から江西ソヴィエ

いであろう。

介と批

を統一的に把握しようとする著者の意欲的労作であることは疑問の 本書が二回にわたる国共合作を中国現代史の中で位置づけ、それら 以上、私は、本書に対するいくつかの問題点を指摘してきたが

余地のないところである。

(中央公論社 一九七三年) (一九七三・一一・二一)

田田 雄

(二五三)